

princess  Lover!

プリンセスラブ!

シルヴィア=ジャン・ホッセンの恋路

空蝉

原作：Ricotta / 表紙：こもりけい / 挿絵：吉飛雄馬

立ち読み版





登場人物紹介

Characters



シルヴィア＝ ファン・ホッセン

フィルミッシュ公国の筆頭貴族で代々騎士を務めてきたファン・ホッセン家の長女。皇帝から授かった剣と鎧を公の場に必ず身につけて行くほど騎士としての誇りが強い。真面目を通りこして堅物だが純粹でまっすぐな性格の持ち主。愛称はシルヴィ。





ほうじょういん せい か
鳳条院 聖華

秀峰学園の社交部代表。新
進気鋭のファッションデザイナー
でモデルもこなす才女。

シャルロット＝
ヘイゼルリンク

日本に留学中のヘイゼル
リンク公国の第一王女。
気さくで明るい性格で、楽
しいことが大好き。



マリア＝
ファン・ホッセン

天使爛漫で明るい性格の女
の子。姉のシルヴィアと哲
平の恋路が気になるおませ
なお年頃。

ふじくら ゆう
藤倉 優

有馬家に仕える哲
平の専属メイド。細
やかな気配りで主で
ある哲平を支える。



ヴァインセント＝
ファン・ホッセン

シルヴィアとマリアの父親。極度の
親バカで特にマリアを溺愛している。

ありま てっぺい
有馬 哲平

祖父・一心の息子として、
有馬グループの跡取りとなっ
た新米セレブの少年。



CONTENTS

◎第一幕 愛しいあなたと過ごす日常	7
◎第二幕 妹も、私も……あなたに首ったけ	55
◎第三幕 スケベな、私だけのナイト様	101
◎第四幕 二人きりのビーチで	144
◎第五幕 大切なあなたと共にできること	191
◎最終幕 あなたの傍で育むもの~愛しい家族~	250



「見ないで、うく……ぐす、お願いだから、見ないで……」

結合部から彼女の腿、白くすべやかな生脚を伝い落ちる。枝分かれした黄色い液は少年の恥毛にまで及び、温かな、さらついた感触を刻んでいった。黒々とした毛並みをはね飛ばす勢いの強さ、この黄ばんだ汁は愛液などではないと、改めて知る。

「はあ、は、ああ……！ シルヴィ、だいじょうぶ、だから……泣かないで」

恋人の嗚咽おえろが響くたび、結合部から腰の芯にかけて痺れるような喜びが奔り抜け、心に鋭い痛みが芽生えた。まぶたの裏がチカチカと瞬き、股間の鼓動と同調する。

今もピチャピチャとリノリウムの床に滴り、飛び散って、あたりにぬくみと水滴を撒き散らす恋人の尿液。よつほど溜まっていたのか、まだ勢いは衰えずに哲平の恥毛したたに強かにぶち当たっては滴っていく。

跳ね返りを浴びてぐしょ濡れの彼女の下着は透けて、奥の薄い金糸の茂み、果ては貫かれぱくりと口を開く陰唇の艶やかな形状までが丸見え。なまじ最初から脱いでいるよりも淫靡な光景が少年の目を愉たのしませ、肉欲の塊である肉棒をより隆起させる。

（あ……今、シルヴィのクリトリス……見えたッ）

ぼつちりと浮いた肉の芽を目にした途端。恋人の涙に感じていた罪悪感ずいきは、随喜ずいきの悪戯心に姿を変えた。——放尿しながら、彼女は感じているのだと知ったから。

「てっ……ぺい……？ ……ふあっ！ な、なんで中でまた大きくううっ」

「泣いてるシルヴィが可愛いから……って言ったなら、うく……怒る？」

重なる肉ヒダで続けざまに肉竿をくすぐられながら、今にも漏れそうな白濁をこらえ、唇を噛み締める。こんな気持ちをつい今しがたまで排尿をこらえていた彼女も味わつていたのだと思うと、腰元が震え上がると同時に——底無しの悦楽が、肉棒の根元から尻のほうにまで駆け抜けていった。

ずんッ——！

「ひああんっ！　だ、からあつ、なぜっ、なぜまた突くのだああつ」

たまらず腰を突き上げたのに合わせ、シルヴィアの唇から、唾液の糸を引いて赤い舌がこぼれ出る。少年のへそ下に耐えがたい甘い衝動がとぐるを巻くのと、金糸に彩られた肉色の唇の奥で、貫かれた悦びに子宮口が切ない痺れを轟かせたのが、ほぼ同時。

「わ、たしはやめてくれとっ、ああくううっ」

またギチギチと、膣洞全体が窄まって牡肉を奥へといざなおうとする。

「う、はあつ……ココは、離したくないって言ってるよ？」

指摘しつつ、沸き立つ射精欲求を押しとどめ、パンパンに腫れた肉槍でまたひと突き。

「ひあんっ！　あ、ああうううっ、ばかっばかあああああつ！」

あなたは意地悪だ——パクつく彼女の唇が歓喜の嬌声を響かせながら、そう紡いだ気がする。こんな「ばか」なら何度言われたっていい。愛しい恋人の、なんら飾りのない心底

からの声が聞けるのなら、何度だって、いつだって、意地悪な男になってやる。

「滑るといけないから、両足とも抱えちゃうね……そ、れっ……うく、ツツは、ああ！」
「だからっ、せ、せめて床を拭かせてっ……やつああああああああアア〜!!」

「ずぶぢゅ……ツツ、ごぶンツツ!!」

恥じらう恋人の尻をひとなどで。そして間髪入れずに彼女の右脚も抱え、腰を支点にして完全に持ち上げてしまう。自然の成り行きで結合部はより奥深くつながり、少年は心地よい重みと肉悦を、むずがる淑女は快楽のみ、半ば強制的におたがいの性器で享受した。

「っひ、あ……!! お、おくまでえっ……哲平の、きて……えっ、あああはああ……」

子宮口をぶち抜かれたシルヴィアは今まで以上に舌を突き出し、口端からはよだれをこぼして、はしたなく煩悶する。もう体裁も整えられぬほどに肉の悦びに埋没した彼女の股間で、また尿汁がちよろちよろと迸った。

「うんっ……シルヴィの一番奥っ、今コツンツッてぶつかつたの、感じたよ……!!」

肉棒の先端で恋人の中心地を貫いた少年もまた、弾力と粘り気に満ちた子宮の感触の虜となつて、目を潤ませ感触を思い出しては惚け顔。しきりに蠕動する膣肉の蠢きにもおびやかされて、本当にすぐそこ——肉棒の根元まで白濁の塊が、腰が抜けるほどの愉悦と共にせり上がってきていた。

「か、はっ……はふう、ふ、ふううっ……もう、ダメだぞ。突いたら、あふあ……奥を突

いてはダメだ……」

シルヴィアはずり落ちぬよう恋人の腰に脚を、首に腕を回してぎゅつとしがみつく。離れたくないという想い以上に、彼女の心を支配していたのは――。

「これ以上奥を、子宮を突かれたらおかしくなってしまう……んっ、はぁ……!! きつと、哲平の前でもつとはしたくない自分を曝け出してしまふんだ……だ、だからア……」

だがそんな怯えを見越していた少年は、にこりと笑つて、腰を振るう。

「だいじょうぶだから……どんなシルヴィも、俺が受け止める、からッ……!!」

「はっ……んっううううううううううう!!」

目一杯、奥を、恋人の弱点である子宮口を突き上げる。揺さぶられる彼女は口元を塞ぐことも、羞恥と快楽に溺れた表情を覆うこともできずに、ただぎゅつと、いつそう強く抱きついてくれた。

「っひあつ! あ、あぁううつ! 奥はっ、だめエ……!! わからなくなるっ、自分を見失つてしまひそうに、なっ、るからアア……ひいあぁあッ!」

言葉とは正反対にぎわめく膈壁が、まるで牡を奥へ奥へと誘い込もうとしているようである――哲平の腰はとどまることなく求めに応じ、強く、激しく子宮口を貫き続ける。

ぎゅつと抱けば、重なる胸元で豊かな乳房が押し潰れた。ブラ越しにも鮮明なその柔ら

かな感触に蕩かされ、ますます腰を突き上げれば、擦れ合ううちに乳房を包む白布はめくれ上がってくる。

「ひう！ あ、ああ……乳首が、擦れつ、あひいいつ！」

「シルヴィのおっぱい、張りがあつて、でも柔らかくて……好きだよ」

こぼれ出た乳首からの摩擦刺激にビクリと跳ねた恋人の膣肉が、告白を受けてさらにとろみとうねりを増した。

乳を揉む代わりに、抱えるために添えた右手で尻肉をふにふにと揉みこめば、なおさらに。シルヴィの尻は時には逃げるように真横に揺れ、突き上げられ、密着する腰に押されてたわんでは、小刻みな痙攣を内部にまで響かせる。

(は、ああ……つ、や、ば、も、う……出るっ)

彼女の腰が揺らぐたびにぶつかる位置が変わり、新たな肉の刺激に悦びながら悶え、亀頭が震えた。小さな痙攣でひっきりなく搾られる肉幹も、ねとつく蜜汁たつぷりの膣内での居場所を刻むように、延々と快楽の証——先走り汁を吐きこぼす。

混ざり合う体液がグチュグチュとイヤらしい粘着音を響かせ始めても、シルヴィアはうつむいたまま、まだ懸命に恥じらいという衣（こも）で悦びを隠そうとしている。

「シルヴィ……顔、見せて……」

「わ、私、につ、んんっ！ は、恥を晒せと……言うのかあ……！」

「違うよ……恥ずかしくなんてない。俺は、そうは思わない……んっ！」

恋人の顔を覗くように真下から顔を潜らせ、結果的に彼女の柔乳の谷間へとあごが挟み込まれる形となった。これ幸いと乳肉をあごでくすぐり、谷間を拡げて、顔面を押し込んでゆく。

「ふあんっ！ て、てっぺえっ!! や、やああ……は、あああんっ！」

伸ばした舌先でぼつちりと咲く桜色の突起を捉え、手放さぬように強く吸いついた。右乳首をこころ舐め転がせば、膣内の締め付けもどんどん増してゆく。髪を振り乱し、ついに少年の目論見どおり。シルヴィアはよだれと涙と恥じらいと、胸一杯の快楽で蕩けきった顔を上げてくれた。

「やつと、見ふえへふれは……んばっ、ぢゅちゅうっ！」

啜えた右乳首を引き伸ばして、顔の上半分だけ乳の谷間から這い出て、上目遣いに恋人の顔を仰ぎ見る。

「やはあっ、あああ！ ちくびっ、伸びッ……いつああああああ〜！」

離さぬように強く歯先で捕まえた彼女の乳首がジンジンと悶えるそのたび。眉は切なげに震え垂れ下がり、半開きの瞳は陶酔の色合いを強く帯びて、同じく半開きの唇を、甘い嬌声が突いて出る。

「ずぼずぼっ、お、奥までエ……！ 哲平のが、入ってるっ、硬く膨れて、わ、私の中を

押し拵げてえええ！」

少年の肩にあごを乗せたシルヴィアは、荒い吐息の合間に率直な感想をたどたどしく綴っては、己の羞恥を煽られキュウキュウと膣洞を収縮。埋まる牡肉を締め上げ肉悦を与えると同時に、狭まる膣肉全体で硬く膨れた肉の存在を感じ取り、女の中心部を支配される悦びに打ち震えた。

「ふ、あああつ哲平！ てっぺええっ！」

搾られる肉棒に、もう工夫して腰を使う余裕など欠片かけらもなく。ただ真っ直ぐ子宮口だけ狙って突き上げ、タイムリミットが近づく中で一直線に限界への階段を駆け上ってゆく。

「シルヴィアっ、んっ、んぢゅううっ……！」

散々吸い尽くした右乳首を手放すと、ちゅぽんと音がしてぷるりと乳肉全体が揺れた。すぐさま恋人の唇を塞ぎ、こぼれる彼女の唾液を啜っては、己のそれと掻き混ぜ、おたがいの高まる被虐を股間に充填する。

「てっふえ、いいっ……はぷっんちゅうっ、てっふええ……！」

キスするのが好きな彼女はもうすっかり蕩けた眼差しで、臆することなく真っ直ぐ見つめてきてくれた。濡れた瞳が、潤んだ膣肉のうねりが、恋人の限界を訴える。返事代わりに小突いた子宮口に、早く吐き出したいと震える亀頭を押しつけることで、少年もまた限界を伝えて——ラストスパートをかけた。

——ぐぼぶぢゅうううつ！ ぢゅぼツ！ づぼづぼづぼぼオオツ！

「ツツ……！！ このまま、シルヴィの中で……」

「はああつ、あ、ああううう！ あ、ああつ放つてええつ、あなたの、感じさせつ……んっ！ ちゅう、ちゅ、ちゅうううツ……！！」

恋人の同意を得てひときわ膨れた肉先が、どすと子宮口に腰をすえて随喜のカウパーを噴き漏らす。くぱりと開いたままの尿道口はなおも震え、巻きついてくる膣粘膜の蠕動に、まるで食まれているような錯覚すら覚えてしまう。

口付けに夢中なシルヴィアもまた、尻を大胆に弾ませ、いつしか進んで腰を使い始めていた。汗と尿と愛液とで濡れる太ももが、哲平の腰のあたりで交差し、強くしがみつくと彼女自身の意思で、二人は隙間なく密着する。

ぶぢゅつ！ づぶぶつ！ ぢゅつぢゅぼおつ、ぐぼぼつ！

「んふううつ……！！ 哲平つてつぺえつてつぺえ……ツツんんあああああああ！！」
「うくツ……くツツ！！」

絡みつく肉ヒダが、カリ裏に熱烈なキスを浴びせた。引き剥がすように突き入れ、また戻ってきては膣肉に抱き締められ、耐え切れなくなつてはまた突き入れる。

溜め込んだ肉欲の塊が、背筋から腰骨を伝い、装填されて幹を震わせた。同時に弾んだ恋人の背を左手で抱きとめ、右手で揉んだ尻肉の中心へと目一杯腰を押し入れて――。



姉妹揃っての（好奇と軽蔑の）視線がチクチク突き刺さって、心身双方が痛む。

（……にしても）

優も通う私立秀峰学園しゅうほうがくえんは水泳の授業がない。冬に転校してきた哲平も、そのぐらいの知識は持っていた。それに、優が今着ている水着はやたらとぴっちり彼女の肢体に張りついて、形よい二つの膨らみを際立たせ、股下もきゅつと締め付けて、食い込まんばかりだ。

正直言って、裸と同等、ひよつとしてそれ以上に目の毒だ。

「ひよつとして、優さん。それ、サイズが小さいんじゃない……？」

「は、はい。その……水着の持ち合わせがなかったものですから、中学生時代の物を」

素すの表情で言つてのける彼女は、どうやら気づいてはいないらしい。あるいは学校指定の物がイヤらしいはずがないという既成概念めいたものに囚われているのか。

当人の感覚はどうあれ、中学生時代からずいぶん育つたらしい優の纏うスクール水着は刺激的だった。

「あ、あの。哲平様？ ……どうかされたのでしょうか」

「放っておけばいい。そのうち正気を取り戻す」

「じゃあ、三人であそぼっか」

事情の呑み込めない優に、呆れ顔のシルヴィアと無邪気なマリアが連れ立って、遠浅の海をざぶざぶと歩み去ってゆく。

「……はっ！ ま、待ってえ」

「……ふんっ」

あわてて追いかける少年に、恋人からの厳しい視線の矢が突き刺さる。隣でニシシと含み笑いのマリアは、やつぱり色々とおませさんだ。

（あちゃ。まいったなあ）

多少恋人の機嫌を損ねる場面もあつたが、ひとまず優を連れ出し骨休めさせるという一つの目的は達成することができた。

（マリアちゃんも楽しんでくれてるみたいだし、後は……）

チラリと視線を向けた先で、まだ少し拗ねた印象のシルヴィアが、おそらく故意にだろ。隣のマリアを構うようなそぶりを見せ、自然と目を背けてしまう。

「……はあ」

今日、遠くはるばる南国の海にまでやって来た、最大の目的。恋人との仲直りは、また一歩二歩と後退してしまつたようだ。

「それじゃ、いっくよ。それっ」

ぽふんっ。

「あたっ」

前触れなくマリアが放つて寄越したビーチボールが側頭部を直撃。もちろん痛くなどは

ないのだが、思案していたところに不意をつかれて一瞬きよんとしてしまふ。

「どうしたの、お兄ちゃん。……ひよつとしてどこか、おなかとか痛い？」

あんまりぼけつとしているものだから、自分よりも小さな女の子にまで心配をさせてしまう始末。これではいけないと頭を振り、どうにかこうにか気分を切り替えを図る。

「ううん、なんでもないよ。だいじょうぶ。よしっ、それっ優さんいくよー」

ぼふっ。下手打ちレシーブでふわりと浮き上がったボールは、弧を描き右側のメイド少女改めスク水少女の元へ。

「はい。……シルヴィア様」

ぼんつ、と軽く横へ流されたボールは頼りない速度で、さらに右隣、怒れる騎士の胸元へと飛んだ。

「……ッッ！」

——パシインッ！ 横一閃。居合の要領で振り抜かれたシルヴィアの右手の残像だけを捉え、マリアが、優が目を見開く。

静かな怒りをこめられたビーチボールは再度、ぼさつと突つ立っていた少年の下へ。

「……へ。おわぶッ!」

空気入りのビニール製とは思えぬ凄まじい速度で胸元へと飛び込んできて——ほかの女性の動向に目を取られていた少年は、もろにあごをぶち抜かれた。

「哲平様っ」

心配そうな優の声。

「もううっ。本当に困ったお兄ちゃんとお姉ちゃん」

おませな妹のどこまで勘付いているんだかな発言も耳朶をかすめる。

「マリア。人のことを勘ぐるのはレディの作法ではないぞ」

「人のことじゃないもん。いずれマリアのお兄ちゃんになる人なんだから、自分のことでもあるのっ」

「ああもう……そういう言い回しは、どうせ父上に習ったのだろう」

必死に抑えようとしているのだろうが、感情に振り回され震える声音こわねが隠しきれていないシルヴィアが、ちらりと視線をくれた。

目ざとい少年はあごを打たれた衝撃に仰のけ反りながらも、当然見逃さない。

「それに私は怒ってなどいない。有馬殿が誰に目を向けようが勝手なのだし、それは男性として仕方のないことだと理解している」

(理解はしても、納得はしてないんだ……)

証拠に、呼称が以前の堅苦しいものに戻っている。予想以上に嫉妬深い恋人の機嫌をどうやって取り戻そうかと思案し始める哲平の視界すみの隅で、小さな手のひらが揺れた。

(ん……マリアちゃん?)

マリアがちよいちよいと手を振って「私に任せて」のポーズを決めている。後ろ手に、背中側でなにかを隠し持っているような気配。

(ど・う・す・る・つ・も・り?)

口パクでそう伝えると、

(マ・リ・ア・に・ま・か・せ・て)

彼女もまた口パクで応じてくれる。

「二人とも、どうしたのだ。ボールで遊ぶのではなかったのか」

シルヴィアの怪訝そうな表情から察するに、悩める時間はもうほとんどない。

(お願い、マリアちゃん)

ここはシルヴィアを姉としてもっとも良く知る彼女に、任せてみよう。決意して目配せすると、マリアはにこりと微笑み——次いでくふふと悪戯いたずらっ子の笑みを差し浮かべる。

「お姉ちゃんっ。これ……あげる」

「どうしたのだ、急に。これ、は……? やっ……ッひい……!」

マリアの手から背中に隠し持っていた物を差し出した手のひらで受け取った途端、シルヴィアの双眸そうぼうに恐怖の色がにじんだ。

「イグアナのぬいぐるみだよ。ほらっ。こここのスイッチを入ると、動くの」

——ヴィイインッ……。おそらく電動式なのだろう、低いモーター音を響かせてのたの

たと、己の手の上で頬擦りし始めたぬいぐるみに、シルヴィアの顔はますます強張る。

「ひ、きやああああああ!! マ、マリアッ! こ、この気味の悪い物を、は、早くッ。と、ととととと……やっ、いやああああああああッ!!」

「あ、あの、シルヴィア様!? ど、どうなされたのでしよう哲平様」

広大なビーチ中に突如轟いた悲鳴に、事情を知らぬ優がおろおろとあわてふためく。

「う、う〜ん。どうしたんだろうねえ」

マリアと結託した手前、その邪魔をするわけにもゆかず、とりあえずはあいまいな返事で受け答え。お茶を濁す哲平の唇は苦笑交じりだ。

「防水加工だから、海でもだいじょうぶなんだあ」

姉の懇願をさらりと無視して、マリアは状況の呑み込めないでいる優の傍へと移動してしまつた。シルヴィアが、ことのほか爬虫類が苦手であることを知らぬ、この場で唯一の人物を封じ込めるために。

「きやつ……ど、どうされたのですか。マリア様」

「ちよつと寒くなつてきちゃつたの。優さん、このまましがみついてあつたためてもらつていいかなあ?」

突然抱きつかれてくすぐつたそうに小さな声を上げたスク水少女を見上げ、マリアはさりと云つてのけた。

その甘えるようなひとことで、完全に優の意識はマリアへと引きつけられてしまう。

「でしたら、もう上がりましょう。このまま、くつついていきますから」

だいじょうぶですよ、と小さなレディに優しく微笑み、それから主である少年の意思を確かめ「お先に失礼します」とあいさつを済ませ。スク水少女はメイドの顔を取り戻し、じゃれるマリアを連れて砂浜の方へと戻っていった。

「それじゃ、お兄ちゃんはお姉ちゃんと二人で……ゆつくりね♪」

去り際にやつぱりませた台詞せりふを残していった妹に、シルヴィアが目を剥いて震えているのが妙に微笑ましい。

「う、ううううつ……ひつ、また動いた……あ、ああつ。て、てっぺいい。その……は、はやくつ。こ、ここ、この、手の上にある物を。ど、どけ……どけてええええつ」

妹の行動の真意をつかんだらしいシルヴィアが、してやられる悔しさと、ぬいぐるみの恐怖とを比べ続けた結果。ぐつと赤らんだ顔をうつむかせて、絞り出すような声ですてやられるほうを選択する。

「ん、了解しました。お姫様」

恋人の可愛らしい一面に高揚を覚えながら、近づいてそつと彼女の手のひらの上にあるぬいぐるみを取り上げた。

振り返るとまだ砂浜手前にいたマリアが手を振っていたので、スイッチを切つてポーン

と投げてしまう。イグアナは見事なコントロールで青空を飛んで行き、小さなレディの腕の中へと無事帰り着いた。

「は、はあつ、あ、あううつ。も、もういないなつ。ふあ……あ、あああ……つ……」

むぎゆうつ。心底安心したらしい。恋人は震える身体を押しつけて、少年のぬくもりを享受する。哲平もまた、押しつけられた乳肌の柔らかさと、背中に回した手で恋人の背をなで恐怖を癒やしながら、細い腰つきをも堪能した。

シルヴィアが完全に無防備だと知ると、次第に手は下方へ。意を決してむにゆりと柔らかくて丸い、安産型の大きな尻肉をつかむ。

「ひあッ!? て、てっぺえつ、あなたという人はっ、こんな時にイイ……」

いきなり臀部をまさぐられたことに驚きつつも、怯える身体を恋人から離す気にもなれず、相当逡巡したらしい。シルヴィアの戸惑いと困惑と羞恥がこんがらがると、複雑な表情が哲平の情欲をよけいに煽り立ててしまう。

視線を砂浜に向ければ、ちょうどマリアと優が着替えのためにロツジへと戻っていくのが見えた。娘に背を押される形で追いやられているヴィンセントがニヤニヤと意味深な笑みを送ってきている。

「これでは、父上の思う壺ではないかア……ッ」

「ヴィンセントさんは……それにうちのお爺ちゃんも関係ないよ。俺がシルヴィを愛して

るってことには変わりないし」

誰にも見られる心配がなくなったことで少年はますます大胆に、いそいそと下ろした海パンから肉棒を取り出し、シルヴィアの股下へとより強く腰を押しつけていった。膨らみ始め脈打つ股間の熱、硬さ、長さから太さまで。牡肉のあらゆる感触を内腿でじかに感じ取って、シルヴィアがピクピクと痙攣する。

せっかくマリアがくれた仲直りのチャンスなのだ。ひるまず果敢かかんに攻めると決めて、哲平は恋人の腿肉でズリズリと、おたがいの肌の火照りを感じつつ、肉棒こすを擦る。

「シルヴィの太ももで……挟んでもらっても、いいかな……?」

言葉の意味を理解して、ピクリとまた大きく彼女の美味おいしそうな太ももが弾んだ。

「そ、そうしないと収まりがつかぬのだろう。うう……し、仕方ないから、だぞ? あながどうしてもして欲しいと頼むからあ……」

「うん。俺が無理なお願ひしたつてことで、いいから……んっ」

突飛とらびな申し出に戸惑い、恥じらいながらうつむく恋人の首筋から胸元へ、キスの雨を降らせて、ぐずる彼女をなだめてゆく。唇が触れるたびに増していく火照りと、身体を任せられる恋人の表情が次第に蕩とろけゆく様——心境の移り変わりをたっぷりと愉しんだ。

「い、痛かったら言ってくれ。加減がわからない、から……んっ」

きゅッ——引き締められ狭まった恋人の股下で、両側からむつちりと腿肉に押された肉

棒が歓喜のうめきを吐き漏らす。シルヴィアの健気な発言も牡の支配欲を刺激して、よけいに膨れた肉棒が逆に彼女の腿を圧迫する。

「う、あ……っ、いい。柔らかくて、むっちりしてて……ああ、すごく気持ちいいよっ」

「は、恥ずかしいから口に出して言うのはっ、ああ……！ か、硬あい……」

恥ずかしさに震えるだけでなく、前後にゆつくりとスライドし始めた恋人の腰は、明らかに快感を食らうと率先して動き始めていた。

（一度火がつくと、ほんとにエッチになっちゃうからなあ。シルヴィは……♪）

でもそれは自分も同じこと。目の前に愛しい人がいて、たがいに求め合っているのだ。燃え盛らないほうがどうかしている。

愛しさを伝えようと強く抱き締めれば、ビキニ越しにもはつきりとわかるほど張り詰めた恋人の乳房がむにゆりと潰れて柔らかさと熱を伝えてくれた。

「くうあ、ああん……っ。ち、くびっ、擦れて、エエ……！」

熱く漏れる吐息と、すがりつく肌の火照りが、抱いていて無性に心地よい。薄い水着の生地越しにも鮮明に肉の鼓動を感じ、摩擦熱で火照る膣肉を震わせてくれているようだ。

濡れてしっとり肌を吸いついたビキニ水着は、哲平にも恋人の股肉の状況、熱を孕み湿った蜜が染み出す姿を鮮烈に伝えてくれた。

「もつと、もつと擦ってあげる……ん、くうう！」

手のひらに収まりきらないたつぷりの尻肉をつかんで腰を引き寄せ、押しつけた肉幹でゴシゴシと水着の股布を扱く。律動に揺れた恋人の上半身でも勃起した乳首が自然と少年の胸板との間で擦れて、上下両方での刺激に甘い嬌声が響き渡る。

(ああ……っ、腰、痺れてきたア……！)

「ふああっ、ひんっ！　いつ、ああア……！　哲平ってっぺえっ……！」

シルヴィアの太もももいっそう強く肉棒にしがみついてきて、肉棒は悦び、悶え狂う。その上小刻みな痙攣が牡の根元にまでゾクゾクと伝わって、少年の精を搾ろうとしているようにすら思えてくる。

ずりっ、ずりりっ……ぢゅ、ぢゅにゆるるうっ……。

「はう、うっ……うああんっ！　擦れるウ……。熱く、なるウウ……！」

欲情した男女の股間から染み出た欲望汁が薄い水着一枚を通じてグチュグチュとイヤらしく鳴る。摩擦で熱された股下の水が絡んできて、バチャバチャと弾け、興を添えた。その都度二人の唇は重なり、求め合い、舌先を絡め合う。やがてつながる口元でも、股下に負けないくらい淫靡な粘濁音が響き始めた。

(もっど、もっど……おおっ。シルヴィの声が聞きたいっ。感じたいッ！)

恋人の甘い鳴き声。恥ずかしげに締め付けてくる内腿の熱っぽさ。熱く漏れる吐息が首筋をなでるくすぐったさと、抱き締める肢体の柔らかなぬくもり。どれも比べようがない



ほどに愛しくて、この上なく男の劣情を刺激する。

たまらず引き攣る腰の奥で、ドクドクと白濁の塊が沸き立った。

「ひいああうんんっ！」

脈動に晒されて恋人の腔肉が切なげに震える。咎める目つきはすっかり蕩けて潤み、ギチギチ締め付けてくる腿のもじつきが執拗に肉棒を扱き立てて。

「くう、あ、ああッ……そろ、そろっ」

間近に迫った限界を伝えるまでもなく、触れ合う腿肉で彼女も感じ取ってくれていたらしい。交わした視線がしつとり濡れそぼち、一気に太ももと腰それぞれが、前後に激しく、快感のみを追求する単純な動きへと変化した。

「はあ、アッ……！ ひくう……っ！ わた、しもおっ！」

じゅわつと染み出た蜜汁の粘つく感触が、水着の股布越しにもはつきりと伝わる。肉幹に絡みついてくる恋人の快楽の証を嬉しく思いながら、腰骨に溜まった快楽が電流となつて背筋を伝うのを鮮烈に感じ——少年のピストンは止まらなくなつた。

ばぢゅっ！ ぶぼんっ！ ぶぼっぢゅぬぶぶぶッッ！

海水の冷たさなんてとつくに感じていない。掻き混ぜられグチグチと鳴るおたがいのツユの粘つきと摩擦で生じた熱に浮かされながら。

「はあっ、あは、ああっ……シルヴィ……ッ！」

「ふ、わあっ……汚い、から、ああ……っ。はひいんっ！ 排尿をの、飲まれてえへええっ、い、いふううああああ!! あッ、ああ——ッッ!!」

びくんっ！ ふしやああああああっ！ ぢよぼぼぼぼぼぼぼぼッ!! びゅふぶッ！
ぶふううッ！ びゅッびううううううううううッ!!

眉震わせながら潮と尿を噴き漏らし、絶頂に浸る恋人の、突き出た舌がイヤらしく濡れ光る。弱々しく咎めるような目つきが股間に突き刺さっても、常の凍るような鋭さに硬直する必要は少しもなかった。

果てなく襲う絶頂の波に溺れながら。愛しさゆえの肉欲に突き動かされた彼女の喉もまた、延々と吐き出される白濁の子種を躊躇せずに飲み下し、喜色にまみれた表情を晒してくれているのだ。

「ぢゆるっ！ く、うああああっ……おあいこ、だよ、シルヴィ……っ」

だから、少年も遠慮はしない。吐精の衝撃がまだ肉幹を巡って痙攣させられる中。愛しい人の味を覚え、味わい尽くしたいと純粹に思った。シルヴィアの股肉の痙攣が鎮まり、溜まりに溜まった尿液が出尽くしてしまっ、その時まで。彼女のお漏らしを舌で、唇で、目で愉しむ。

欲深い肉棒は一発出した程度では萎えもせず、想い人の排泄汁を腹に収めるその都度ムクムクと、いつそう雄々しく隆起し続けていた。

「んんむうっ……まら、まらおおひくなるるか……てっふえいい……んふうあああッッ！」
 牡の脈動を頬裏で感じて、シルヴィアの腰もビクンと跳ねる。尻の谷間では啞え込まれたままの哲平の指が、恋人の絶頂の余韻を長引かせるためにピストンを続けていた。受け止めるアナルはすっかり泡立つ腸液でほぐされ、指の動きに合わせブポブポと卑しい音が鳴り響く。

（だって……こんなに好きなんだ、シルヴィイのこと……っ）

恋人の献身的な奉仕を一身に浴び、むしろよけいに雄々しく隆起する。その硬く強張った肉端を彼女の胸元へと再度押し当てれば、すぐに目を合わせてきて恥じらいながらもわずいてくれる。

じつとりと湿った触れ心地が、恋人の準備も整っていることを如実に示していた。

「んく、うああ……ふああんっ……。き……きて。てっ、ぺいい……。あなたとならっ、ああ……どんなことでも乗り越えられる。あくっ、あああかた、あいいいっ」

いったん名残惜しげに離れてから自らベッドに寝そべり、おずおずと広げた股下へといざなつてくれた、上目遣いのシルヴィイを心底から愛しく思う。

「うん、一緒に。一緒に、どこまでもいこう……シルヴィイ」

このあふれんばかりの愛情をどう示せばよいか。もじつく恋人の濡れた股間と、そっと引き抜いた指先に付着するトロトロの蜜汁を見た瞬間に、心は決まった。

「シルヴィ……脚、もつと開いて？」

「んあつ……こ、こんな体勢で、す、するの……。あ、あはあ……つ」

仰向けで待つ彼女にキスを捧げ、力の抜けた肢体を横向きにさせる。背中側から抱きついて、さらには恋人の左足を抱え、大きく股を開かせてしまう。

きつと、前から見ればシルヴィアの汁まみれの股間は丸見えになっているはずだ。

「み、見えてしまう……は、あふうう……！ トロトロにふやけた、私のアソコが、ああ……全部、み、見えてるうううつ」

弾む乳肉越しになだらかな下腹部を、そのさらに向こうではしたなく大股開きとなった己の股座を覗き、恋人が羞恥の声を上げることにも予測済み。

先だつての奉仕合戦できつちりと結わえた彼女のトレードマークたる髪がほつれ、うなじでは何本もの後れ毛が汗で濡れ光って、妙な艶めきと甘い香りを放っている。誘われるように恥じらい赤らんだうなじへと口付けて、そのまま腰を彼女の股下でスライドさせた。ずりつ、ずりゆりゆつ……！

「んんはあああ……！ じ、焦らさないで、えっ！ は、はやつ……」

早く、と言いかけた唇があわてて、浅ましいおねだりを閉じ込める。そんな強固で健気な抵抗を突き破りたくて、何度も膣穴と尻穴の間を肉幹で行き来、執拗に擦り、熱を孕ませてゆく。

「シルヴィの口から……っ、聞きたいな」

濡れそぼつ膣口から漏れた蜜汁を潤滑油に、ますます肉幹はスムーズに行き来を始める。たつぷり濡らしておいたほうがすんなりと入る。当然、その意味合いもあつた。けれど今はひたすら肉棒を巡る切ない痺れの心地と、恋人の煩悶する表情とに魅せられている。

「ううっ、うう……っ！ どうしてこのようなときにまでええ……いあ、ああんっ！ はひ……っ。やはり、っ、睦み合うときのあなたは意地悪だああっ」

愛しい人の困ったような、我慢するような、それでいて加速度的に快楽に溺れてゆく、その瞬間の顔が見たくなつてしまうからだ、と、そつと耳打ちし伝えた。

途端に、激しく収縮した膣穴からドロリと濃い蜜汁が押し出され、肉幹からたがいの太ももにまで濃密な汁気が伝い落ちる。

(さすがに強情……っ、ああく、ううっ……こつちもあんまりこらえられない、かもつ)

数分ほどもねちっこく膣口付近を擦つて、次第に肉棒全体へと広がる痺れと衝動に少年のほうまで切羽詰まりだしたころ。真つ白なシーツに黒々とした大きなシミをいくつも刻んで、丸い尻肉を揺らし。こらえきれなくなった恋人の唇は唾液の糸を引き開いて、とうとうイヤらしいおねだりを口にした。

「……れて。私のイヤらしく疼くアソコにっ！ 哲平のをに入れて、ほしい……ああうっ！」
ぢゅぶッ！ 懇願を聞き届けるか否かのギリギリのタイミングで、腰を突き出し肉穴

へと亀頭をうずめる。ただし、恋人が願った割れ目を通り過ぎ、むっちりとした肉の詰まった尻の谷間で隠れるようにひっそり息づく、小さな、排泄用の窄まりに。

「ひああぐっ!? ち、ちがつ、そこでは、あつ、ああああつ……ッ! ツンツンつ、だめえええええつ!」

輪ゴムのように厳しく引き締まる入り口に、亀頭が何度も押し返される。その都度めげずに腰を迫り出しては、亀頭で窄まりを押しした。時にはシワの寄った肛門周辺を肉端でくすぐり、彼女自身の膣口からすくい取った蜜汁をまぶし、降伏を迫る。

そして、ついに。

「んはおっ! 入っ、あつ、ああああああああああ……ッッ!」

づぶぢゅぶぶぶぶつ……づるんっ!

入り口を突破した後はたやすく、一気果敢に奥深くまで腰を突き入れることができた。

「んくあつ……! つく、なんか、前した時と感じが違うっ……!?!」

横臥位おうが、しかもシルヴィアが脚を大きく開いているせいで、肉先のぶつかる位置が違っていている。おまけに前もってしつかり指と舌でほぐしたことが幸いしたのか、初めての時よりもねっとり、尻穴全体が蕩けて牡幹を歓待してくれた。

「前につ、してくれと頼んだのにいっ……ふあつ、ああ、またお尻で愛されてしまうのだな……ああつぐ、奥に哲平の硬いの、か、感じるううう!」

シルヴィアの拗ねたよう^すでいて悦びに溺れた甘い涙声^すが、振動となつて直腸を震わせ、みっちり締め上げられた肉棒にまで伝わってくる。ほぐれているとはいえ尻穴の中はただただ狭く、おまけにきつく幹の頭から根元まで余さずに締め付けてきて、気を抜けばすぐにでも追いつかれてしまふそうだ。

同時に腰の根元を襲つた、濡れた腸壁に精を搾られているかの如き感覚がたまらなく少年の意識を溺れさせる。

「お尻だけじゃないよ……っ、後で、うん、すぐに前のほうも慰めてあげる……ッ！」
「ぶぢゅうううッ！　ぶぢゅんッ！」

「んあふっ、うああんっ！　あ、ああっ……私が、あなたを忘れないようにっ、この身体と……心につ、あなたを刻みつ、あつあふうううっ！　はあうっ、んくううんっ！」

目一杯突き込むたびに、恋人の声^すがリズムカルに弾んだ。反射的に遠ざかる彼女の尻に腰を押しつけ、空いた右手を彼女の右手指に絡ませて、ぴったりとくつき合う。隙間なく寄り添つた状態で突き上げたシルヴィアの尻穴は、ヌルヌルと情熱的に牡肉へとすがりついてきた。

「シッ、シルヴィッ……！　うんっ、わかっている……君の中に俺をっ……大好きだつて気持ち、全部注ぐからっ！　だ、だからっ！」

ドクドクと鳴りっぱなしの鼓動が、恋人の甘い声を聞くたびにいつそう高鳴つてうるさ

いくらいだ。なのに、彼女の言葉は不思議と心に届き、また心音が跳ね上がる。

柔らかな腸壁を押し潰して進む亀頭からも、抗いがたい甘い痺れがひっきりなしに届けられて。開きっぱなしの尿道口から延々と濃厚な先走りがただ漏れる。

「あ、ふうっ！ 感じ、るうっ、哲平のっ、哲平の熱いの、お尻の中でかかってっ、えあああ、あ、あ、ああーっ！」

犬がおいで縄張りをマーキングするように、恋人の中にいた印を刻んでゆく。

律動に合わせて、べつとりとこびりついた先走りで濡れ光るドレスの胸元が大きく弾む。その魅惑的な光景に惹かれるようにつないだ手をいったん放し、恋人の右腋下から忍ばせてドレスの胸元を引き下ろしてしまう。

(シルヴィのおっぱい……いつ触ってもモチモチ、してて……っ！)

いとも簡単に露出した乳肌からの、恋人の乱れる鼓動と熱っぽさにまたよけいな情欲を煽り立てられ、気づけば下弦に添うようにして手のひらで乳たぶをこねていた。

「くふあ……っ！ む、ねええっ！ あ……ア！ 今、おなかの中でピクンってしたああ……！ 熱くて、硬いものが、ああっ、くふ、うううっっ！」

何度触れても飽きない。愛しくも滑らかな手触りと、手のひらに余るポリウム。ふにとどこまでも指が沈んでいくくせに弾力良く弾き返してもくる。有り余る愛しさを伝えたくて、恋人の母性の象徴をたっぷりと揉みほぐし、その都度思考と直結した肉棒を雄々

しく猛らせる。

「シルヴィのおっぱいが気持ちよかったから……あうっ、シルヴィだつて、おっぱい揉むたびにお尻が、っ、キュウキュウ締まつて……引きちぎられちゃいそうだよっ！」

彼女も同じだった。触れ合える悦びと嬉しさに、打ち震えている。左右それぞれの乳丘で可憐に咲く小ぶりの桜色の突起。そのうちの片方——人差し指と中指でつまんだだけで切なげに震える恋人の弱点の一つを、軽く引き伸ばしたり、指腹で転がし、押し潰す。

「くあ……っ、ああんっ！　ひ、響いてるのお！　胸のっ、奥まで、あなたのお……愛情が染みてきてええっ、うれ、ひいっ、からああっ！」

刺激を受けるタイミングに合わせて、みっちり詰まった窮屈な肉穴がますます隙間をなくして、中心に穿たれた牡肉に吸いついてくる。

「おたがいの気持ちいを伝え合えていることが、何よりも嬉しい。心と身体の充足に満たされながら、どちらからともなく舌を絡ませ、求め合った。

「はぶ、うっ……てっふえい、てっふえい……んちゅううううう」

甘い鳴き声を揺さぶりながら、きつく締め付けられていることもあって、膣挿入時よりも相当地に緩やかに抽送する。おかげでじつくりと、シルヴィアの腸内の感触を味わうこともできた。

（う、ううっ……でも、これはっ……！）



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>